

中学校

平成 9 年 度

教育研究員研究報告書

道 徳

東京都教育委員会

平成9年度

教育研究員名簿（道徳）

分科 会名	区市町 村名	学 校 名	氏 名
第 1 分 科 会	品 川	浜 川 中 学 校	山 村 智 治
	大 田	大 森 第 八 中 学 校	館 吉 昭
	北	赤 羽 台 中 学 校	仲 江 徹
	足 立	六 月 中 学 校	江 熊 秀 昭
	葛 飾	奥 戸 中 学 校	古 郡 清 文
	江 戸 川	鹿 本 中 学 校	◎ 江 川 登
	府 中	府 中 第 四 中 学 校	○ 麻 生 隆 久
第 2 分 科 会	台 東	忍 岡 中 学 校	澤 山 高 明
	中 野	第 二 中 学 校	吉 田 修
	荒 川	第 三 中 学 校	太 田 元
	練 馬	三 原 台 中 学 校	金 子 弘 樹
	立 川	立 川 第 四 中 学 校	和 田 孝
	町 田	町 田 第 一 中 学 校	加 藤 敏 久
	保 谷	青 嵐 中 学 校	鈴 木 達 彦
	福 生	福 生 第 二 中 学 校	□ 木 住 野 雅 巳

◎ 世話人 ○ 副世話人 □ 記録係

担当 教育庁指導部主任指導主事 中 村 馨

研究主題

望ましい人間関係を育成する道徳の時間の指導

目次

I	研究主題設定の理由	2
II	内容項目1－(3)「自律の精神」についての指導（第1分科会）	3
1	内容項目選定の理由	3
2	研究の内容と方法	4
(1)	内容項目1－(3)のとらえ方	4
(2)	各学年の指導のねらい	5
(3)	生徒の実態	6
(4)	指導の工夫	7
(5)	指導事例	8
3	第1分科会まとめ	12
III	内容項目2－(2)「感謝・思いやり」についての指導（第2分科会）	13
1	内容項目選定の理由	13
2	研究の内容と方法	14
(1)	内容項目2－(2)のとらえ方	14
(2)	各学年の指導のねらい	15
(3)	生徒の実態	16
(4)	指導の工夫	16
(5)	指導事例	18
3	第2分科会まとめ	22
IV	まとめと今後の課題	23
< 参 考 >		24

I 研究主題設定の理由

《生徒たちの現状》

- (1) 生徒をとりまく環境・社会
 - ・高齢化 ・少子化 ・情報化 ・国際化
 - ・多様な価値観→価値の混乱
 - ・規範意識の希薄化
- (2) 家庭環境
 - ・核家族化 ・相互不干渉 ・独立性（孤立性） ・しつけの不足
- (3) 生徒たちの現状
 - 〔良い面〕
 - ・明るい ・個性的 ・積極的 ・合理的
 - 〔悪い面〕
 - ・いじめ ・リーダーの減少 ・かかわりの拒否 ・消極的 ・同一志向

《課題》

- ・豊かな人間関係の育成

《望ましい人間関係》

- ・挨拶がきちんとできること ・場に応じた言葉遣いができること
- ・礼儀作法がきちんとしていること ・自分の意志を相手に伝え、行動できること
- ・相手を理解し、尊重すること ・協調性があること
- ・お互いを高め合う（認め合う）ことができること ・助け合うことができること

《研究内容》

- 内容項目 1 - (3) : 「自律の精神」(主として自分自身に関すること)
- 2 - (2) : 「感謝・思いやり」(主として他の人とのかかわりに関すること)
- ・内容項目の検討
 - ・生徒の実態の把握(アンケート)
 - ・指導用資料の収集と分析
 - ・指導過程や指導法の検討, 研究授業における生徒の反応

Ⅱ 内容項目 1 - (3) 「自律の精神」についての指導 (第 1 分科会)

1 内容項目選定の理由

- 「望ましい人間関係」を築いていく上で大切なことは、自分の在り方である。
- 生徒は自分自身の行動を省みることがをしようとせず、「他者の行動を非難する」「責任転嫁する」「要求する」などその時の気分で人に接する傾向がある。
- 「人間関係」は集団の中で形成されるが、集団は「個」の集まりである。自分自身がしっかりできていない「個」が「集団」を形成しても、その集団は集団として未成熟なものになり、様々な問題が生じる。
- 「いじめ」においても、周囲の思惑を気にして、他者の言動に左右され、正しい判断力が欠如していることにも一因がある。悪いことは悪いとはっきりと判断する能力が必要である。
- よい行動は誰にとってもよい行動でなければならない。自分や周囲の一部だけにより（楽しい）結果をもたらすものではない。自分の行動が及ぼす結果についてもよく考える必要がある。
- 自分の行動はどのようなものであれ責任がつかまとう。行動をする以上はどのような結果をもたらすかを十分に考える必要がある。
- 「望ましい人間関係」を育成するには、まず、自らの責任によって生きる力を身に付けさせることが大切である。

仮説

生徒にとってより身近で、具体的な場面を設定し、葛藤を起こさせることができれば、自律の精神を培うことができる。

具体的には

- ① 葛藤することによって、自分の考えや自分の大切にしている価値にあらためて気づき、他の考えや価値を知る。
- ② どれが最善か迷い悩むことによって、自分自身の価値観の輪郭が明瞭になる。
- ③ 自分自身の取るべき行動が見えてくる。
- ④ 実際に行動に移せるか、移せないか。(再度の葛藤)
- ⑤ 自分自身にできることを考え、その結果についても考える。
- ⑥ 自分の考えに則って、実行に移す。
- ⑦ いかなる結果になろうとも、自分のとった行動に責任をもつ。

自律の精神

2 研究の内容と方法

(1) 内容項目1－(3) のとらえ方

自律の精神を重んじ、自主的に考え、誠実に実行して、その結果に責任をもつようにする。

◎自律の精神とは

- ・自分の利益のために自己を規制することではない。
- ・他者とのかかわりの中で自己を（正しく）規制する。

◎自主的に考えるとは

- ・自分の判断に基づいて考える。
- ・自分にはできないことはないかと、考える。
- ・自分はどうしたらいいかを考える。
- ・できることの結果を考える。

◎誠実に実行するとは

- ・自分の考えに則って行動する。
- ・雰囲気や圧力に屈しない。

◎その結果に責任をもつとは

- ・自分のとった行動がきちんと説明できること。
- ・結果に対し逃げずに向き合うこと。

しかし、自主的に考えることと、誠実に実行することの間には大きな隔たりがある。困っている人を助けなくてはいけないと考える人が、実際に行動に移すかは違ってくる。

例えば、電車の中で、お年寄りが目の前に立っているときに

A：何で前に立つの、仕方ないなと考えながらも席を譲る生徒

B：お年寄りに席を譲らなければと思い悩みながらも、席を譲れない生徒

上記のようなA・Bの生徒がいた場合に、我々が重視したい生徒像はBである。Bは道徳的心情に基づく行動ができなかった。そのBの心の葛藤を重視したい。そして、この葛藤を経験として生かし、将来に於いて実行に結びつく生徒像を期待したい。

Aの道徳的心情に支えられていない行動は、将来に於いて、場面が変わった状況では、実行に結び付けられないと考えられる。もちろん、Aのとった行動はその場面では大いに評価されるものである。Aにも道徳的心情を身に付け、誠実に実行できる生徒に育ててほしい。



「自律の精神」のとらえ

(2) 各学年の指導のねらい

— 第1学年 —

他者の言動に左右されず，自ら判断することの大切さに気づく。

- ・「悪いことは悪い」と判断する力を養う。
- ・自主的に考えることで，判断しようとする態度を育てる。

— 第2学年 —

他者とのかかわりのなかで，自分の行動を深く見つめ考え，責任を果たそうとする。

- ・自らの判断にもとづいて行動する態度を養う。
- ・自分のとった行動がきちんと説明できる。
- ・自分の行動に責任をもつ。

— 第3学年 —

自分の判断や行動の及ぼす結果についてまで考え，回避することなく責任をもつ。

- ・自主的に考えることで，自分の価値観をもつ。
- ・自分の行動が，どんな結果をもたらすかを十分に考えたうえで，自主的に行動する。
- ・その結果に対し，逃げずに向き合うことで責任をもつ。

(3) 生徒の実態

内容項目1-(3)「自律の精神」に関する生徒の意識を把握するために次のようなアンケートを実施した。

質問1 あなたは周囲の人に頼らないで、自主的な判断で生活していますか。	
ア いつも頼っている。	9.2%
イ 少し頼っている。	39.8%
ウ どちらとも言えない。	40.3%
エ あまり頼らない。	6.7%
オ 全く頼らない。	4.0%

質問2 あなたは物事に対する自分の考え方や判断に自信をもっていますか。	
ア 全く自信がない。	7.8%
イ 少し自信がない。	31.0%
ウ どちらとも言えない。	40.9%
エ 少し自信がある。	15.5%
オ とても自信がある。	4.8%

質問3 あなたは自分の行動に責任をもって、誠実に生活していると思いますか。	
ア 大変無責任だ。	8.0%
イ 少し無責任だ。	28.1%
ウ どちらとも言えない。	38.3%
エ やや誠実だ。	19.1%
オ 大変誠実だ。	6.5%

(実施時期： 平成9年11月)

(アンケートの対象：A区立B中学校・男子245名 女子232名 計477名)

(調査形式： 選択式質問紙法)

上記のアンケート結果を分析すると、約半数の生徒は依存心が強く、約4割の生徒は自らの考え方や判断に自信がないことが分かる。これらの生徒達は、他者の判断や考えに頼ってしまい、自分に対して示される考え方にただ従っていくという場合が多いと考えられる。自らの判断の根拠を明確にもたなかったり、行為の結果について十分に配慮しないために、実際の行動において無責任な結果になってしまうことも少なくないと思われる。これらのことから「自律の精神」を育成していく必要性が明らかになった。

(4) 指導の工夫

① 資料選定の観点

心理的な葛藤が生じるもの。

「心理的な葛藤」と言っても一様ではない。

* 価値と価値の葛藤

例 友達を裏切らないことも大切だが、不正も許せない。

* 価値と行動の葛藤

例 友達を助けたいが、恐くて出来ない。

* 行動と行動の葛藤

例 車椅子を押してあげるのがよいか、黙って見守るのがよいか。

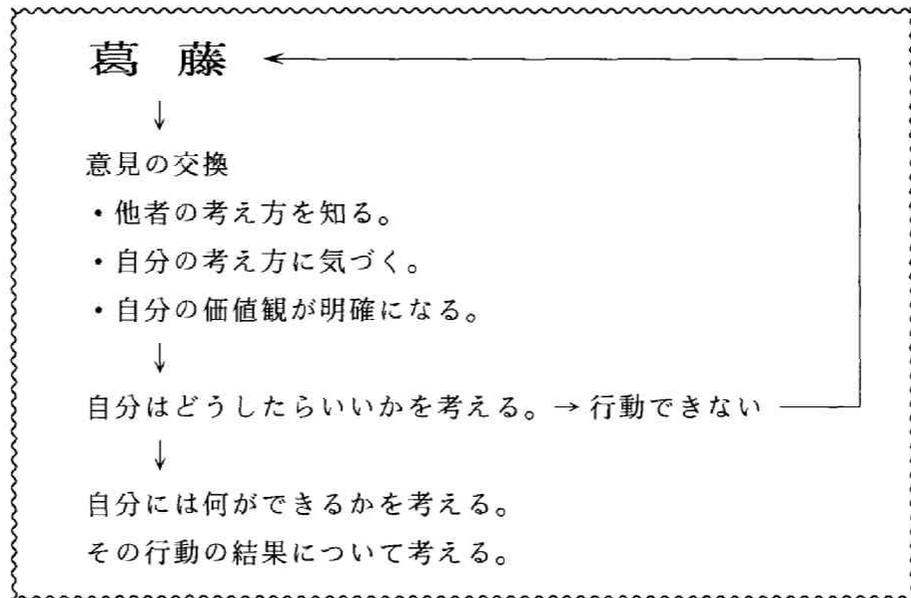
以上のように便宜的に分けてみたが単純なものではない。しかし、資料を選定する際にそれがどのような葛藤なのかを分析することは生徒の発言を受け止め整理するうえでも必要なことである。

② 授業の構想

教師の投げかけで問題点に気づく



意見の交換



自分の考えに則って行動する。→自分のとった行動に責任をもつ。

先の「構想」は、自己の立場や考えを、絶えず教師の投げかけや他の生徒の意見で相対化していく授業を表している。

③ 指導方法と指導の工夫

(ア) 導入における工夫

他者との関わりにおける自分の考えや行動を振り返り、興味・関心をもたせる。
そのために、アンケート、写真、読み物資料、VTRを活用する。

(イ) 展開における工夫

バズ学習、ディベート、ロールプレイング等の手法を用い、多様な意見が出るようにする。

(ウ) 終末における工夫

それまでの授業を通して得た価値観や考え方で終わらせず、現実に即した別の葛藤場面を提示して問題意識をもたせるなど、オープンエンドとする。

(5) 指導事例（第1学年）

① 主 題 名 自律の精神<内容項目1-(3)>

② 資 料 名 「裏庭のできごと」(文部省『中学校読み物資料とその利用』所収)

この資料は、学校生活の中で日常に起こりえるできごとを扱ったものである。友人の言い訳の口車に乗って、ガラスを割った事実を言えなかった少年が、悩みながらも最終的には自分から話しに行く姿が描かれている。

③ 研究内容とのかかわり

友人との関係にひびが入ることなどを気にして、事実を言うことをためらい、苦悩することが日常生活の中ではよくあることだと思われる。そのような時、苦悩を克服して自ら判断し行動することは勇気のいることで難しいことと思われるが、大切なことである。

そこで、葛藤しながらも、最終的には自身の良心に従い、自主的に行動することの大切さを考えさせたい。

④ ね ら い

自身の良心と友人関係との葛藤に苦悩しながら、最後にはその苦悩を克服して、自ら判断して行動することの難しさと大切さを考えさせる。

⑤ 指導過程

	学習活動・主な発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入	1 前もって見せておいた資料のビデオをもとに、概要の整理と確認をする。		<ul style="list-style-type: none"> ○ 資料の内容を思い出させ本時への関心を持たせる。 ○ 黒板を構造的に使い、各場面の内容をわかりやすく整理する。
展開	2 板書を見て、次の内容を考え、発表する。 ① 大輔が去った後の気まずい雰囲気の中で、健二は何を考えたと思いますか。 ② その夜、健二はどのようなことを考えながら過ごしたと思いますか。 <補足> ・健二の心の中では、正直に言わなくてはいけないという気持ちと、正直に言ったら大輔との関係が悪くなってしまうという2つの気持ちが入り交じって、悩んでいるみたいだね。 3 資料の最後の場面の範読を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・雄一に申し訳ない。 ・先生に正直に話した方がよいのではないか。 ・雄一にちゃんと謝った方がよいのではないだろうか。 ・先生に正直に話した方がよいのではないか。 ・先生に言いにいったら大輔は自分のことをどう思うだろうか。 ・大輔のことを考えると先生に言わない方がよいのではないだろうか。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分の言葉で自由に考えさせ、ワークシートに書かせ発表させる。 ○ 周囲の生徒と話し合ってもよいことにする。 ○ 短冊に書かせ、黒板に掲示する。 ○ 生徒の意見を掲示した後、補足をして、健二が、自分の良心と友人関係との葛藤に苦悩していることに気づかせる。 ○ 葛藤しながらも、その苦悩を克服して、自ら判断し行動した健二の姿に着目させたい。
終末	4 現実に即したさらに高次の葛藤しうる場면을提示する。 ③ 期末テストで、カンニングをしてしまいました。監督の先生には見つかりませんでした。テストが終わった後に、友人から「カンニングをしていただろう。知っているんだぜ！いいのかよ。」と言われました。あなたはどうしますか。	<ul style="list-style-type: none"> ・友人に黙っていてくれるように頼み、先生に知られないようにする。 ・友人が先生に話す前にしかたがないので先生に言いに行く。 ・友人の言葉で、自分の誤りに気がつき、先生に言いに行く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ アンケート形式のワークシートに記入させ、後日発表する。

⑥ 評価の工夫

本時の評価の観点として大きく二つを設定した。一つは、「生徒に葛藤をおこさせることができたか」ということ。これは、夜の健二の心情を考えさせることに十分な時間をかけ、周りの生徒と話をしている生徒の間を机間指導しながら、葛藤している健二の気持ちに気づいたかどうかをとらえた。

もう一つは、「その葛藤に苦悩しながらも、最終的には自らの判断で行動することの難しさと大切さを考えることができたか」ということである。3ではワークシートを使用しなかったため、範読したあとの生徒の表情やつぶやきを観察して評価した。

実際の生活の場面では、正しいのはこちらだと分かっているにもかかわらず行動に移せない場合がある。そこで、終末の発問による葛藤が、その後の生活において一般性をもち、生かされているかを観察し、評価した。

⑦ 授業記録

【導入】

前もって今回の資料のビデオを見せておいたのと、各場面の概要について整理して板書したので、登場人物のキャラクターや場面ごとの行動などの把握が容易になり、スムーズに授業に入っていくことができた。

【展開】

ワークシートの発問には、なかなか書き出すことができない生徒が多くいたが、真剣に考えている様子は感じられ、最終的にはほぼ全員記入した。

①の発問に対しては、次のような考えが挙げられた。

- ・雄一は怒っているのではないか。
- ・雄一に今すぐ謝った方がよいのではないだろうか。
- ・先生に正直に言った方がよいのではないだろうか。
- ・この場の重苦しい雰囲気をかき消すためには、どうすればよいのだろうか。

②の発問では、周囲の生徒と話し合ってもかまわないということで自由に話し合わせてから、各自短冊に書かせ黒板に掲示した。

- ・明日、雄一にちゃんと謝ろう。
- ・明日、先生のところにいって正直に話そう。
- ・先生に言ったら怒られるのではないだろうか。
- ・先生に話に行ったら、大輔は自分のことをどう思うだろうか。
- ・大輔のことを考えたら、正直に先生に言わない方がよいのではないだろうか。

などが挙げられた。

3の範読したあとの生徒のつぶやきや表情から察せられることは、

- ・やっぱりね。
 - ・へえー。
 - ・自分だったらできないな。
- などのつぶやきや表情であった。

【終末】

③の発問はアンケート形式で、次のような項目を設定した。

- ・友人に黙っていてくれるように頼み、先生に知られないようにする。
- ・友人にも、先生にも何も言わない。
- ・友人が先生に話す前に、しかたがないので先生に言いに行く。
- ・友人の言葉で、自分の誤りに気がつき、先生に言いに行く。

⑧ 考 察

「自律の精神」＜内容項目1－(3)＞をねらいとした道德の時間において、生徒自身に葛藤をおこさせることがひとつの大きな課題であった。そのため資料も生徒の日常生活でおこりえる題材を選定した。しかし、読み物資料としては登場人物も多く、各場面でのそれぞれの人物の言動や行動がともすると混同してしまい、誰がどのようなことをしたのかが把握しきれなくなってしまうことが予測された。さらに資料の最後の部分に十分な時間をかけ生徒に葛藤させたかったので、前半部にはあまり時間を割かないようにしたかった。

そこで、前もって資料のビデオを生徒に見せることにした。活字離れで映像に慣れ親しんでいる生徒には、この手法が有効であることがわかった。また、導入部で黒板を構造的に使い、場面を追いながら登場人物の言動や行動を整理したことも、生徒に興味・関心を持たせるのに役立った。そのため、生徒も健二の気持ちになって考えることができ、葛藤している主人公の心情がよく理解できたようである。

しかし、翌日の主人公の行動を聞いた後の生徒の反応は、感心している生徒もいたが、ハッピーエンドで終わるドラマを見たあのような「やっぱり」という反応が大勢を占めていたようだった。「こうしなくてはいけない」と結論づけられないように配慮した通りの授業であったが、前述のような反応があったことは今後の課題として十分に検討しなければならないことであろう。

終末のアンケート結果では、同じ「先生に言いに行く」でも、「しかたがないから」という回答よりも「誤りに気づいて」という回答の方が圧倒的に多かった。これは資料を通じて、生徒が「自身の良心に従い、自主的に行動する」ことの大切さに気づいた結果であろう。今後は、実際にそのような立場に置かれた場合、どのような行動をするのか注意深く観察していきたい。

3 第1分科会のまとめ

第1分科会では、研究主題である「望ましい人間関係を育成する道徳の時間の指導」についての指導を展開するに当たって、内容項目の選定を行った。最終的に、集団は個の集まりであるから「望ましい人間関係」を築いていくためには、まず、一人一人が自主的に考え、責任をもてることが前提にあるという結論に達し、内容項目1-(3)「自律の精神」についての研究を進めることとした。

人はだれでも、生きる喜びを実感できる人生を築きたいと願っている。しかし、時として具体的な現実と直面すると、安易な方向に流され自分自身を見失ったり、他者の言動に左右されがちな弱い存在でもある。心の弱さを他へ責任転嫁するのではなく、自分自身の問題として素直に受け入れ葛藤しながらも乗り越えたとき、自律の精神が身に付くのではないだろうか。そして、これは、他の人への共感的理解を深め、人間愛へとつながるとともに、人間として誇りある生き方をしようとする原動力になると思われる。そこで「生徒にとってより身近で、具体的な場面を設定し、葛藤を起こさせることができれば、自律の精神を培うことができる。」という仮説をたて、資料として「裏庭でのできごと」を選定した。

(1) 成 果

ア 研究授業をくりかえす中で、資料を通して十分に葛藤させるような場面を設定する工夫が、生徒に内在する自律の精神を高めさせていくための有効な手段となることが発見できた。

イ 資料は、生徒の心の奥にひそむ道徳的価値をよびさますという重要な役割をもっている。今回選定した「裏庭でのできごと」は、生徒の身近な題材を取り上げているため、生徒の体験を想定させやすく、ねらいを達成するのにふさわしい資料であった。

ウ 教材の提示、発問の精選、発問の仕方、話し合いの仕方、板書の仕方、ワークシートの活用等、指導方法の工夫をしたことにより、生徒は道徳の授業に興味・関心をもち、主体的に参加する意欲を示すようになってきた。

(2) 課 題

ア 現代社会において生徒を取りまく生活環境は、「与えられ」「してもらう」ことを当然のように考える他律的・依存的な態度を醸成している。道徳の授業だけでなく、教育活動全体を通して意図的に体験的な学習の場を設定していくことが自主的・自律的な生き方を育てる重要な課題である。

イ 生徒の実態に即し、感銘を与え、深く考えさせる資料の選定や様々な指導方法の工夫を図りながら、生徒の心に響く道徳の授業を、更に目指していく必要がある。

Ⅲ 内容項目 2 - (2) 「感謝・思いやり」についての指導 (第 2 分科会)

1 内容項目選定の理由

《自己中心的》

- 中学生の時期には、他の人とのかかわりを大切にしたいと思う反面、他の人の立場や気持ちを考えずに行動してしまう傾向も強くなる。
- 人間関係を自ら築こうとしたり、より深めようとする活力が弱い。
- 「人は人のなかで人になっていく」と言われるように、他の人とのかかわりを通して成長していくのであるが、自分は一人でも生きていけるんだと錯覚しているような行動が見られる。
- 生きる目的がはっきりせず、何事も精一杯やり遂げようという力が弱くなってきているようである。

《社会性を身に付ける》

- 第15期中央教育審議会答申にあるように、自ら課題を発見し、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力が求められている。
- 自分を律する力、協調性、思いやり、感動する心などの豊かな人間性や社会性を身に付けることが必要である。

《共に生きる》

- 人間関係を豊かにする基本は、人間尊重の精神を基盤とし、相手の立場を考慮して、その心情を共感的に理解していくことである。
- 一人一人がお互いを認め、思いやりの心をもって人に接することが大切である。
- 望ましい人間関係が、周囲の力で育てられるとともに、自分自身の努力が大切であることを考えたとき、人とのかかわり方を学ぶ必要がある。
- 社会に生きる人間として、他の人を理解し、他の人とかかわることが自分自身を豊かにし、人間として生きることの喜びにつながるものであり、「人は一人では生きていけない」ということを自覚する必要がある。

仮説

人は支え合って生きていることを理解し、共に生きる喜びを感じることができれば、人間愛が深まり、感謝と思いやりの心が育つ。

2 研究の内容と方法

(1) 内容項目2－(2)のとらえ方

内容項目2－(2)は、人間愛と感謝、思いやりの心について取り扱っている。この研究では、人間愛を中心に置き、感謝と思いやりの関係を明確にすることから始めた。その上で人間愛を高める要素を考え、さらに人間愛の根底にあるものは、人間尊重と平等を重んじる心だと考えた。

人間愛について

◎人間愛は、共に生きることから生まれると考える。

- ・その人間愛は、感謝と思いやりを通して現れる。
- ・自分が多くの人々によって支えられてきたことを自覚すれば、自ずと感謝の心が生まれ思いやりの心が育つ。
- ・感謝と思いやりは表裏一体のものである。

人間愛を高める要素

◎認め合う心

- ・その人の気持ちを知る。
- ・その人の立場になって考える。

◎感じる心（人に対して）

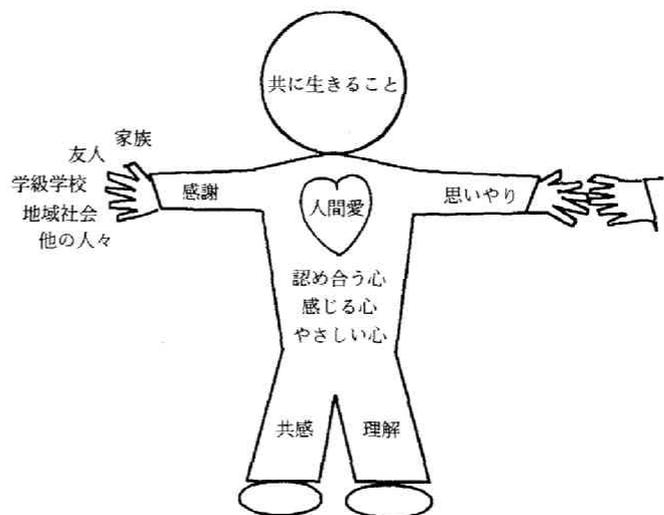
- ・「人間っていいな」「人間ってすばらしい」と思う。
- ・人の生き方に感動する。

◎やさしい心

- ・いたわり、励まし（温かいことば）。
- ・手をさしのべる。または突き放す。
- ・黙って見守る（相手を気遣う）。

人間愛の根底にあるもの

- ・人間尊重の精神
- ・差別しない平等な心



「感謝・思いやり」のとらえ

(2) 各学年の指導のねらい

— 第1学年 —

人は互いに助け合い、支え合って生きていることを自覚し、他の人を思いやる心情を育てる。

- ・「人は一人では生きていけない」ことを自覚する。
- ・多くの人に支えられて生きてきた自分を感じ、まわりの人への思いを膨らませる。

— 第2学年 —

相手の立場や気持ちを理解し、他を思いやる心情を深め、実践する態度を育てる。

- ・相手の立場に立って、他の心情を共感的に理解する。
- ・感謝や思いやりの心をもって、他の人と温かく接していこうとする態度を養う。

— 第3学年 —

人間愛の精神を深め、共に生きることの喜びを感じる心を育てる。

- ・人間のすばらしさに感動し、他の人と共に生きていこうとする心を育てる。
- ・人間としての生き方を考えながら、自己実現に向けて努力する意欲を高める。

(3) 生徒の実態

質問1 あなたは他の人から「思いやり」を受けたことがありますか。				
	1年	2年	3年	
ある	80.7%	82.2%	85.2%	
ない	19.3%	17.8%	14.8%	
質問1-a 質問1で「ある」と答えた人で「思いやり」の心で他の人に接したことがありますか。				
	1年	2年	3年	
ある	81.7%	76.6%	80.4%	
ない	18.3%	23.0%	21.4%	
質問1-b 質問1で「ない」と答えた人で「思いやり」の心で他の人に接したことがありますか。				
	1年	2年	3年	
ある	27.0%	20.6%	29.2%	
ない	74.6%	84.1%	85.4%	
質問2 あなたは他の人から「感謝」されたことがありますか。				
	1年	2年	3年	
ある	86.5%	83.3%	88.0%	
ない	13.2%	16.4%	15.4%	
質問2-a 質問2で「ある」と答えた人で他の人に「感謝」したことがありますか。				
	1年	2年	3年	
ある	88.3%	90.2%	88.1%	
ない	12.8%	9.83%	8.07%	
質問2-b 質問2で「ない」と答えた人で他の人に「感謝」したことがありますか。				
	1年	2年	3年	
ある	39.5%	34.5%	36.0%	
ない	62.8%	63.8%	58.0%	

(調査対象) : 都内8中学校・第1学年326人, 第2学年354人, 第3学年324人

(調査実施日) : 平成9年9月

(調査方法) : 選択式質問紙法

「質問1-b」の回答で「ある」と答えた生徒の数が、「質問2-b」の回答で「ある」と答えた生徒の数よりも約10ポイント低い数値であることが際立っている。

これは次のように分析できる。「思いやり」の心は、「思いやり」を受けたことがあれば、他の人に「思いやり」の心で接することができるが、一方、「感謝」の心は「感謝」された経験がなくても、他の人に「感謝」できる。

すなわち、生徒は主体的に他の人にかかわることはあまりなく、受け身の行動になっている場合が多いということである。ここからも、「思いやり」に対して、現代の生徒がそれほど敏感でない様子が見て取れる。

(4) 指導の工夫

① 資料選定の観点

- ・生徒たちの生活に身近で、興味・関心を引くもの。
- ・生徒が登場人物などの心情を感じ取りやすいもの。
- ・生徒の多様な価値観や、心の葛藤を引き出せるもの。
- ・これからの生徒の生活に発展的につながるもの。

② 授業の構想

今回の研究では、「人は支え合って生きていることを理解し、共に生きる喜びを感じることができれば、人間愛が深まり、感謝と思いやりの心が育つ」という仮説のもとに授業を展開していくことにした。まず「人は互いに助け合い、支え合って生きていくことを自覚し、他の人を思いやる心情を育てる」ことに気づかせ、そこから「相手の立場や気持ちを理解し、他を思いやる心情や実践する態度」を考えさせる。そして、考えた内容を普段の生活で生かしていくような道徳的実践力を身に付けさせることをねらいとした。つまり、「人間愛の精神を深め、共に生きることの喜びを感じる心」を育てるのである。授業を構想していく上で、生徒に理解して欲しいことは「感謝・思いやり」であり、また、そこから生まれてくる「人間愛」である。この二つを柱にいかに関業を展開するかを考えた。

今回の資料は、病氣療養中の少女がクラス旗を通してクラスメートとの心の交流を描いた心温まる資料である。見知らぬ土地に来たばかりの少女が病氣になってしまい、孤独な闘病生活を送っているときに、一人のクラスメートが見舞いに来た。その後、クラスで少女のために何かできないかという思いから、クラス旗を掲げようという内容である。注意する点は、この資料が病氣の少女に同情するクラスメートの行為だけに終わらせないことである。少女の立場として、クラスメートから思いやりを受け、その思いやりに対して少女は感謝する気持ちをもつ、という点を生徒に感じとって欲しい。また、クラスメートの立場として、少女の孤独な心をクラスメートが受け止めることで、少女に対し、励ましたり陰ながら応援する気持ちが人間愛につながることを知ってもらいたい。すなわち、「感謝・思いやり」は常に表裏一体で、「人間愛」はそれに通じるものであることを生徒に感じとってほしい。

③ 指導方法と指導の工夫

指導上考慮した点

- ・資料を読んだとき、いかに相手の立場になって考えさせるか。
- ・一人一人が考えを出し合い共に深め合う授業ができるか。
- ・生徒の心に直接伝わるような発問はどのような発問か。
- ・他の生徒の意見を尊重できる雰囲気をもどくように作るか。

(ア) 導入における工夫

「イラストの旗を見せ解説する」ことで生徒が興味・関心をもち、考える意欲が高まるように工夫する。またBGMを流すことでクラスの雰囲気を和ませる。このような工夫をすることで、教師の発問が生徒に素直に受け入れられ、生徒自身も素直に考える雰囲気ができあがると考えた。また、資料提示の方法を工夫することで、生徒はひとつの発問に集中できる。

(イ) 展開における工夫

少女の心の動きを確認する。このとき、場面ごとの絵を黒板に提示し、それを見せることで生徒達の自由な発想を引き出す工夫をした。特に、この資料は生徒の心に訴える資料なので、発問も自然に伝わるように、発問数を厳選し生徒の思考が途切れな

いようにした。

次に、模擬学級会という形でロールプレイングをさせることで、少女の気持ちや周りに携わった生徒の気持ちを実感させる工夫をした。体験の少ない生徒について模擬学級会という形で模擬体験をさせることで、相手の心情を理解し感じとれると考えた。

模擬学級会を行うときの注意点として、司会者を立てて学級会を行うなど、こちらから事前に筋道を決めずに、生徒の思い思いの意見を引き出すことができるよう工夫した。

場面転換にはBGMを使った。「レモン色の旗の代わりにクラス旗が掲げてあり、さらにその中心に自分の布を見たとき少女はどうしてそんなにうれしかったのだろうか」という、中心発問をした。生徒の意見をしっかり出させるためにじっくりと考えさせ、色々な意見を引き出す工夫をした。また、色々な意見に対して互いに尊重する雰囲気を作るようにした。

(ウ) 終末における工夫

「今回の授業の感想」を書かせることで本時の授業内容を深めた。感想を書かせることで授業を振り返り、「思いやり」を自分に再確認することができると考えた。次の道徳につながる終わり方、満足できたという終わり方になるように工夫した。

(5) 指導事例（第2学年）

- ① 主 題 名 「感謝・思いやり」＜内容項目2－(2)＞
- ② 資 料 名 「旗」(『自分を考える』暁教育図書株式会社 所収)
- ③ 研究内容とのかかわり

人は一人では生きていけない…。誰でも、この言葉については疑わない。当然、人間としての生き方についての関心が強くなってきた中学生も例外ではない。しかし、一方ではそれぞれが違うことの素晴らしさに目を向けず排他的な考え方をもったり、他との人間関係を思うように築けない中学生もいる。そして、いじめも後を絶たない。

このような現状をみたとき、一人一人がお互いを認め、思いやりの心をもって人に接することが大切であると考えた。今、中学生が「人は一人では生きていけない」ということを、言葉だけでなく、実感をもって自分の中に位置づけることが必要なのではないかと考えた。

④ ね ら い

人は支え合って生きていることを理解し、共に生きる喜びを感じとることによって、人間愛を深め、感謝と思いやりの心を育てる。

⑤ 指導過程

	学習活動と主な発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点
導 入 5 分	《資料の配付》 「こちらが“開いてください”と 言うまで開かずにご覧ください。」 ・表紙を開き、資料についての話を 聞く。		・資料は冊子にし、表紙をつける。表紙を開いて1ページ目に「旗」のタイトルを入れる。

<p>展 開</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教師による資料の朗読を聞く。 (約8分) ・(朗読後)「それでは資料をそっと閉じてください。」 ・資料を閉じる。 		<ul style="list-style-type: none"> ・早口にならずに、感情を込めて朗読する。 ・資料は最後まで提示せず場面3までとする。 ・BGMを活用し、リラックスした雰囲気を作る。
<p>展 開</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・少女の心の動きを確認する。 <p>【場面1】 「この時の少女はどんな気持ちだったのだろう。」 「少女はなぜレモン色の旗を友だちのように感じていたのだろう。」</p> <p>【場面2】 「友だちが見舞いに来たときの少女の気持ちはどんなだったろう。」 「少女はどういう気持ちで赤いバラの縫い取りをしたのだろう。」</p> <p>【場面3】 「それから一週間で過ぎ、なんの音さたもなかったとき少女はどんな気持ちだったのだろう。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最後の一文を提示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・孤独だ・勉強が心配 ・寂しい・クラスメートにも忘れられてしまう ・旗が生き生きとはためく姿にあこがれて、自分もそのようになりたいと思ったから ・さびしいから ・毎日変わらずに自分の前にいてくれるから ・うれしかった ・忘れられていなかった ・楽しくやっていけるかもしれない ・見舞いに来てくれた友だちへの感謝の気持ち ・がっかりした ・今までよりもっとさびしい ・あの時の友だちのやさしさを信じたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・黒板に場面1～3の3枚の絵を掲示し、資料を見返さなくても少女の心の動きがおえるように配慮する。 ・1つ1つの補助発問は着席のままフリーに発言させ、あまり時間をかけないように心がける。
	<p>少女は、この町に引っこしてきてよかったと、心から思った (約10分)</p>		
<p>展 開</p>	<p>「場面3から4のあいだに、クラスではどのような話し合いやはたらきかけがあったのだろう。」</p> <p>【模擬学級会】 (役割演技開始)</p> <p>鈴木さん(君)の話</p> <p>↓</p> <p>クラスメートのいろいろな意見</p> <p>(約15分)</p>	 <ul style="list-style-type: none"> ・幸子さんはとても寂しい思いをしている ・どうにかして幸子さんを励ますことはできないだろうか 	<ul style="list-style-type: none"> ・自由な発想でかまわないが、 ①クラス旗をつくる ②少女が最後は心からよかったと思ったの2点はきちんとおさえさせて、話し合いに臨ませる。 ・少女、見舞いに行った生徒に役名をつける。(少女…幸子、生徒…鈴木) ・司会役、鈴木役はあらかじめ決めておく。

<p>展 開 40 分</p>	<ul style="list-style-type: none"> 資料の場面4の部分の朗読を聞く。 もう一度少女の気持ちになって考え、ワークシートに記入する。「いつもはレモン色の旗が掲げられているところにクラス旗が掲げられてあり、さらにその中心に自分のクリーム色の布を見たとき、少女はどうしてそんなにうれしかったのだろうか。」 (中心発問) (「少女は旗を見たとき、どんなことを考えたのだろうか」補助発問) (約7分) 	<ul style="list-style-type: none"> クラスメートの思いを感じたから クラスメートに大切にされていることを実感したから 	<ul style="list-style-type: none"> BGMで場面転換を図る。 ワークシートは、クリーム色の画用紙を二つ折りしたもので、表紙に赤いバラのマーク入り 書き終えたら静かに表紙を閉じるよう指示する。 何名かに発表してもらいたい旨告げておく。
<p>終 末 5 分</p>	<ul style="list-style-type: none"> 発表する。(3～4名) 教師の話聞く。 		<ul style="list-style-type: none"> 他の生徒の意見を尊重する雰囲気をつくる。

⑥ 評価の工夫

本時の評価の観点として、次の二つを設定した。

「相手の立場や気持ちを理解することができたか」

これは少女の心の動きを追うと共に、机間指導しながら対話し、少女をとりまく環境や心情を理解したかをとらえた。

「他を思いやる心情を深め、実践する態度が育ったか」

模擬学級会(役割演技)を通して、クラスメートが少女のためにどのようなことを考えたかを演じさせたが、演じることや沈黙して考える姿にそれぞれの心情の深まりがあらわれた。今回はそれを観察し、ワークシートに書かれている内容を評価した。

⑦ 授業記録

【導入】

教室にあらかじめ校旗を置いておいたり、資料を冊子にしたことで、資料に対する期待感をもたせることができ、スムーズに授業に入っていくことができた。

【展開】

前半は資料の朗読(途中まで)と少女の心の動きを確認した。資料の朗読はイメージを広げ、資料の中の世界に浸らせたいためにBGMにのせて行った。生徒は教師の朗読を聞き、資料の文章を目で追い、クラス全体が落ち着いた雰囲気の中で授業が進んだ。少女の心の動きの確認はこの後の役割演技による模擬学級会に時間を取ったため、教師が机間指導をしながら、生徒は着席のままフリーに発言をさせた。資料

の朗読は1回だけで、資料は閉じさせたが、生徒はおおむね少女の心の動きを把握しているようであった。

後半は前半をうけて、【場面3】から最後の一文に至るまでの少女のクラスメートたちの動きを模擬学級会（役割演技）により再現した。見舞いに行った生徒役と司会役はあらかじめ指名された生徒が演じた。なかなか意見が出なかったが、司会の指名により、いくつかの意見が出始めた。資料の最後の部分は提示していなかったが、資料と同様な意見（旗の真ん中に少女の布をおき、レモン色の旗の所に掲げる）が出たのには、驚いた。発言としてはあまり出てこないが、生徒それぞれが自分自身の中で考えている様子であった。

展開の最後に中心発問をし、ワークシートに少女の気持ちを書いた。

- ・みんなが自分のことを思ってくれたんだということがわかったから
- ・クラスメートにあんなにすごいことをしてもらって、この上ない親切だと思ったから
- ・クラスメートが自分を温かく受け入れてくれていることを実感したから
- ・クラスメートのやさしさを感じたから
- ・自分のためにそこまでしてくれるクラスメートに感謝の気持ちでいっぱいになったから

【終末】

ワークシートの発表により、いろいろな意見・考え方に触れさせたかったが、時間がなく、教師の問いかけによるオープンエンドとなった。

⑧ 考 察

模擬学級会で十分時間を確保したかったため、前半の少女の心の動きを確認する場面はなるべく時間をかけないようにしたが、更に発問を精選するなどの配慮が必要であった。

資料については、読後にさわやかな温かい余韻を残す資料で、生徒も資料の世界にスムーズに入っていくことができた。また、最初は資料の最後の部分を伏せておくなど、提示の仕方も工夫でき、発問の幅も広がった。

役割演技による模擬学級会は、活発な意見が交わされる雰囲気作りと事前の準備が必要であるが、道徳の授業の中で資料中の登場人物になりきり、演技をしていく中で最後には自己を見つめることができ、有効であったと思う。授業では、あまり活発な意見のやりとりはなかったが、発言はしないが意見を考えているその時間が、まさに生徒が自分の考えを深めている時間であった。

生徒のワークシートの「この上ない親切」や「感謝の気持ちでいっぱいになった」といった言葉に今回の授業研究の成果が見られた。

3 第2分科会まとめ

(1) 成 果

生徒は、どのような状態を「望ましい」と考えているのか、ということから検討を始めた。その結果、深い理解と共感に立脚し、温かい人間愛を中心に、共に生きることが望ましい人間関係であり、また、表裏一体である感謝と思いやりが、重要であることを引き出すという観点から、具体的な指導方法の研究を進めてきた。

【指導方法の工夫・改善】

- 生徒と教師との望ましい人間関係：主題でもある「望ましい人間関係」を、普段の生活の中で考え、感謝や思いやりの気持ちで自由に意見交換ができる環境の整備が重要である。
- 生徒の実態の把握：アンケートを実施し、事前に感謝や思いやりについて考えるチャンスを与えると共に、生徒の実態を客観的に分析し、授業に臨んだことで生徒の動機付けやスムーズな導入に役立った。特に導入部分で用いることは有効であった。
- 役割演技の活用（模擬学級会を通じて）：生徒が、普段の自分とは違う立場から、物事をとらえ、考えることができた。今回は、模擬学級会ということで、現実との差が少なく、本音を聞き出せた。
- 黒板などのビジュアル化及び構造化：内容ごとにまとめを行い、さらに視覚に訴えかける情景のイラストの掲示や実物などの展示は、臨場感を出し、授業の流れや内容を理解する上で役に立った。
- 雰囲気づくり：BGMを用い、心に語りかけるような朗読を行うことで、登場人物に共感し、感動することができた。その後の展開に大きな影響を与えた。また、BGMの活用は、場面の切り替えや、落ち着いて考えさせる場面で役立った。
- 話し合いの形態：全体、または、小グループや隣同士での話し合いと、形態を変えることで、意見を引き出すことができた。
- 発問の工夫：補助発問を有効に使うことで、円滑な援助活動ができた。

(2) 課 題

- 役割演技では、普段から同様な授業形態で行い、慣れ親しませておくことなどの事前の指導が必要である。
- 校内で、道徳への取り組みを、他教科などと相互協力することが大切になる。
- 授業の目的を明確にし、資料の提示においても、軽く扱う部分とじっくり考えさせる部分とをしっかりと考えておく。決して欲張らない。
- 生徒が、教師の予想した答えに合わせようとするのではなく、生徒自身が、本音で意見を言えるようにする。
- 資料の選定については、十分に検討することが重要である。例えば、感動させる資料、判断させる資料、葛藤させる資料などの違いや、また、学年による発達段階を考慮するなど。
- 授業では、余韻をもって終えるようにし、その後の生活の中で、継続的に考えさせる指導が大切である。

IV まとめと今後の課題

1 成 果

- (1) 道徳の授業において、一人一人の意見を尊重し、自由な意見交換を大切にすることにより、生徒どうしや生徒と教師の望ましい人間関係づくりに役立った。
- (2) 資料の選定については、指導のねらいを念頭に置きながら十分に検討し、できるだけ生徒の身近な題材を取り上げることにより、ねらいにせまることができた。
- (3) VTRや情景のイラストを用いるなど、授業のビジュアル化を工夫することにより生徒に授業の流れや内容を理解させるのに役立った。
- (4) アンケートを工夫することにより、生徒の実態把握に役立つことはもとより、授業の導入において、生徒の興味・関心をもたせるのにも有効であった。
- (5) 模擬学級会、ディベートなどを取り入れることにより、授業に変化を与え、多面的に考えさせることに役立った。
- (6) 発問を精選し工夫することにより、生徒に考える時間を十分に与え、より深く考えさせることができた。
- (7) BGMを活用し心に語りかけるような朗読を行うといった方法で場面の雰囲気大切にすることにより、登場人物への共感や感動を呼び起こすことができた。

2 課 題

- (1) 生徒の心に響く道徳の授業が行われるようにするため、生徒の実態把握、適切な資料の選定、発問や指導方法の工夫を更に積み重ねること。
- (2) 道徳的实践力を高めるため、教育活動全体を通して意図的に体験的な学習の場を設定していくこと。
- (3) 各学校や地域で他の先生方の理解と協力を求め、研究の成果を広めていくための努力や取り組みを行っていくこと。
- (4) 今後も研究を継続し、授業実践を通して改善を図り、よりよい道徳の時間の指導の在り方を目指していくこと。
- (5) 道徳の授業を計画的かつ継続的に行っていくこと。
- (6) 道徳の時間を確保するため、道徳の授業を月曜日の1校時や土曜日に位置づけないこと。

< 参 考 >

1 内容項目 1 - (3) を指導するのに適する資料

1 「一番星」 (『中学校(道徳)読み物資料とその利用 3』 文部省)

悟史は体も小さく気も弱い中学生。同級生の隆におどされ、康夫の靴を冷たい雨の降る外に放り投げて帰る。隆の卑怯なやり方に腹を立てるがどうすることもできず、またその片棒をかついでしまった自分自身への嫌悪感に悩む。

2 「郵便局でのできごと」 (『道徳教育推進指導資料 6』 文部省)

郵便局へ小包を取りに行くが、印鑑などを忘れてしまった知香は、少くくは何かなるかもしれないと、窓口の人に聞いてみる。窓口の人は郵便局の規則に従い小包みはもらえなかった。家に取りに戻り、再び郵便局へ向かう途中、四つ角で一時停止を怠り、小さな男の子を自転車ではねそうになる。周りの人のきつい口調で、気持ちは重く沈む。

2 内容項目 2 - (2) を指導するのに適する資料

1 「かけ合う一声の大切さ」 (『中学校(道徳)読み物資料とその利用 2』 文部省)

ある雨の日、筆者はバスに乗っていた。お年寄りに席を譲ろうとしながらもなかなか実行できないでいた。やっと勇気を振りしぼって席を立ったが、近くのサラリーマンが座ってしまった。そのお年寄りは「ありがとう。そんな君の気持ちだけでうれしいよ。」と言って、バスを降りていった。あの時、もう少し勇気があれば、もっとうれしいお年寄りの顔が見られたのにと後悔する。

2 「黄色い弁当箱」 (『私たちの生き方 2』 創育)

大学生になっている筆者に、高校時代の温かい思い出として残っているものがある。それは、苦しい生活の中で十分な昼食をとれないときに友達のお母さんが作ってくれた黄色い弁当箱のお弁当である。「お礼などということは考えずに、ただ一生けんめい勉強してください。」というお母さんの言葉に、筆者は胸がいっぱいになる。